



ピットインダウン

(おきあがりこぼし)

創刊号

発行日 2015年4月30日

発行人 矢代 レイ

秋田市御野場7-1-29-305

「ピットインダウン（おきあがりこぼし）」創刊にあたって

最近のわたしは、「詩」の枠を超え、自由に詩作を試みたいと感じてきていました。昨年、病気をし、その思いをいっそう強くしました。

詩の国の深い霧の中で、ゆらめきながらも、言葉の底にひそむ表情を追い求めたい、わたしを待っていてくれる詩に近づきたい、と思うようになりました。

霧は時間の風では容易に晴れないだろうが、いま新しいことをやることで、「詩」が未来に向きを変え、少しでも動き出すのではないかと考えました。

「ピットインダウン」とは、ミャンマーのダルマのことです。日本の「おきあがりこぼし」と同じです。名前には、なんと投げられても立ち上がり、笑顔を見せることの大切さを伝えるという意味があります。三年前に知り、心の片隅に大切にしていました。

詩の道をたゆまず歩むことを願って、この紙片を「ピットインダウン」と名づけました。

詩友の皆様におとどけます。

ご感想をお聞かせくだされば、うれしいです。

雪囲ふゆがこえ

ふと冷えがゆるんだ 小正月

軒の氷柱しが越しに

雪ゆきにうずもれた村が見える

ムシロを巻き上げた戸口とのかぐちに

晴れ着を着た女兒じよつこ 二人

姉あねは

赤と黒の縞のモンペに花柄はながらの袖そでなし

妹いまは

桃色の風呂敷ふし敷ボツボツチチにドンブク

手にはホンデホンデキ棒キ棒を持ち

なにか楽しそうに話している

ほのぼのとするような華やかさで

ぱつと花が咲いたような

春の香りがとどくような

薄暗い おもたげな 冬の生活に

明るさを呼び込んで

やわらかい 温かな

すっかり忘れていた藁わらの匂い……

絵のなかの姉あねが

じつとわたしを見ている

そのめんけめんけ眼まなこが

どことなく姉あねに似ている

わたしは妹いまになり

セピア色の冬の古里へ

すべっていく

さわさわさわと降る雪のなか

頬を赤く染めた女兒あねたちが

さどめんさどめんここしている

ねらねらと練ねらった

まぶしい黄色きいろの料理りょうり

* 1 勝平得之作「かきだて（雪囲）」

* 2 スカーフのような帽子

* 3 花嫁の尻しりを打つ棒。小正月の風習

* 4 雪をサイカチの実で染める遊び

本

1

いま会ったばかりなのに

ことばの群れが押し寄せてくる

仮面をつけて

わたしをつかまえにくる

三日月の夜

2

海の色をしたことばを

みつけてよろこんだ

美しく深いもの

波がしらは

しる

3

太陽のかたちの文字をみていると

夏が

あざやかにひろがる

ことばという器のなかに

つよい意志がみえてくる

4

サキへ

サキへ

キガセイテ

メクル ページ

ユビサキニ トマル キタイ

5

肌ざわりがすることばが

わたしとつながる

瞬間

わたしは

夢みる樹になる

詩

絹織のあかるさを秘めた春の野は
黄色の花群に

蝶をあそばせている

斜面では

詩人が ひとり

みどりの風にささやいている

*

空の中央に

ピアノの絵をかいた

鍵盤は紫いろの雲

鳥がひかりの五線をわたり

よるこびのメロディーが満ちる

*

柘目の部屋

答えが得られないままの

ことばの貧の連鎖

ことばの牢を

わたしは抜け出さねばならない

ただ 知のひかりの鍵が……

*

詩人の海に

こやみなく

ことばが舞いおちる

海面みなもにおどる無数の細紋

白く洗われる 感受

詩人は

どこにもない

ひかりの織物を紡ぎ

詩ことばの花を生ける

